



私の推薦図書④地球・世界

企業経営漫談士 岡野実空

「経営人」にとって、知性の基礎は「一般教養」。それは「事業力」「人間力」の裾野として、自分という山の高さを決めます。今回その山麓からまず選んだのは、宇宙が誕生してから今日に至る、「地球」と「世界」の全歴史を知るための一冊。そしてそれに続くのは、海外および我が国が生んだ賢人による、現在から未来への考察指南書です。

① 『137億年の物語』

近年世界中で話題をさらった、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』(上・下)。今回それを押しのけトップに据えたのは、イギリス人科学ジャーナリスト、クリストファー・ロイド(“ドク”俳優ではない)の労作。「地球」と「人間」の全歴史を、自分の子どもたちのために書き下ろした図鑑は、バランスの取れた42の項目と解説のわかりやすさで世界的なベストセラーとなり、間もなくテレビのシリーズ番組にも登場しました。

因みにそのバランスの良さと、技術・科学と歴史、世界の地域や文化、宗教などの面において。しかも地球の全歴史を24時間に置き換え、各事象の時刻とそれぞれのつながりを確認しながら、大スペクタクル図鑑として楽しむことができます。

身近に迫る隔離生活に備え、パンデミックの歴史も学べる、この本のご用意をお忘れなく！

② 『100年予測』

「我々はどこから来たのか？我々は何者か？」の次は、「我々はどこへ行くのか？」の「考え方」を学ぶための一冊。その師は、ハンガリー生まれで、「影のCIA」長官の異名を持つジョージ・フリードマン。極東の島国に暮らし、私たちの多くが苦手とする「地政学」は、前世紀のグローバル化によって、いまや「一般教養」の重要科目になっています。

ところでやたら面白いこのシリーズから学ぶのは、世界中の情報や、それに基づく師の予測の当否ではなく、その「前提」や「過程」など、「考え方」の基本。具体的には、従来からの世界の「地理」に基礎を置き、日進月歩の「科学技術」を睨んだ、「現実主義」に基づく、未来への「仮説」の立て方です。

またそれは、現在のグローバル化した社会の中で、政治・経済の専門家だけでなく、各組織の現実的な「戦略」を考える経営人ミドルにとっても、必須の教養科目なのです。

- ① 137億年の物語
クリストファー・ロイド著 野中香方子訳
文藝春秋
- ② 100年予測
ジョージ・フリードマン著 櫻井佑子訳
早川書房
- ③ 世界地図の中で考える
高坂正堯著 新潮選書

③ 『世界地図の中で考える』

かつて我が国でフリードマンに匹敵する存在だった、元京都大学教授の故高坂正堯氏。1968年に出版されたこの世界旅行記は、すっかり赤茶けた外見とは裏腹に、いまだにその内容の古さを感じさせません。その中で師は、科学や技術の発達によって、複雑につながり合った「世界」を見る視野や視座を、半世紀を超え私たちに教え続けています。

またその没後20年(2016)記念復刊は、いまのグローバル化の中で茫然とする私たちに、師が草葉の陰から、熟考のための課題図書を提示したかのようです。特にコロナ禍で少子化が急加速する我が国にとって、その第一部タスマニア原住民の悲劇は、とても他人事とは思えません。

さて今回の締めは、ドラッカーの再登場。先のコラムから落とした「社会論」の埋め合わせとして、『新しい現実』(1989)からの引用です。「もし20世紀という世紀が我々に教えてくれたものを一つあげるならば、それは人類の相互依存性である。先進世界だけみても、全体の繁栄なくして一国の繁栄はありえない」。ところが、その前項に書かれている人類の生存環境たる地球の「生態系」は、いままさに許容範囲を超えようとしています。

以上のような賢人たちの警告を、私たちが心で理解するのは、その何十年後。そのとき凡人は、対策への協力あるのみ！(まずは運転免許証、返上！)

2021年5月3日 実空